郷土史 ていね

第48号
平成23年12月14日
手稲郷土史研究会会報

第67回（平成23年11月9日）定例会の会員発表

満州の荒野を駆け巡る

～ 自分史の中から ～

前田　　平木重男　氏

平木さんの「満蒙開拓団」入植、そして、「原地入隊」の一部始終は、氏の手記「乗り越えた天寿」に詳しいが、そもそも「満蒙開拓団」とは如何なる集団であったか。「大辞泉」（小学館）によると、「満州事変後、日本が満蒙地区に送った農業移民団、多くがソ連、満州国境地帯に入植、第二次大戦の敗戦直前、ソ連の対日参戦で、関東軍から置き去りにされ、多大な犠牲者を出した」とある。

まさに、この解説通りの結果となった満蒙開拓団の難行苦行のいきさつが、平木さんの口から、趣深く語られた。

平木さんの家は、生誕地の三笠で、安定した農家を営み、自分は国鉄職員で、満州に赴く必然性は全く無かったのに、国策の包囲網は、一家を取り込み、「絶対にこの地から離れない」と云い続けた父親も、最後には決断し、所有する農機具、家財道具の一切合財を貨車に積み込み、満州に向ったのである。

平木さんは、自書の中で「運命の決断」と記している。

平木さん一家の入植地は、ソ連国境に近い東安省の哈達河（ハタホ）で、夏は炎熱、冬は酷寒に悩まされながら、一家は野良仕事に奮闘した。その間にも戦争は激しさを増し、入植団員の若者は、次々と現地で招集された。平木さん自身も、昭和20年4月に牡丹江の部隊に入隊した。手記には「憧れの軍隊」とあり、軍国少年の一人であった平木さんは、軍人を夢見ていたことが分かる。「入隊したからには同期戦友より少しでも早く功績をと考え、一生懸命努力した」。その甲斐あって、中隊の中で只一人下士官試験を受ける幸運を掴み、そして合格したのである。こうした「天にも昇る思い」も、ソ連参戦の情報で、情勢は急転回、関東軍は武装解除の運命が予測され、所属部隊の移動も決まった。

平木さんは、この瞬間をとらえ「捕虜になり、シベリアで死ぬなら、逃げて捕まり、殺されても本望」と、脱走を決意するのである。それは何と終戦3日前のことであったと云う。脱走後の苦境を乗り越え、ようよう奉天の難民収容所に辿り着き、昭和21年10月13日、引揚船で祖国に向ったのである。

平木さんの、当時を語る口調は重く、時折、往時を回想して、苦渋の選択や行為をかみしめている様であった。

然し、「己れの人生を逞しく生き抜く」精神の健全性は、今もかくしゃくとして、衰えを知らぬ様に見受けられた。

（文責：國井和夫）

第67回（平成23年11月9日）定例会の会員発表

「手稲鉱山の現況」について

前田　　林　俊一　氏

発表要旨を記述させていただきますが、前段の「手稲鉱山の概要」の詳細につきましては配布資料を参照してください。

１．手稲鉱山の概要

旧手稲鉱山は札幌市の中心部から、北西約12km、手稲区手稲金山の手稲山の北斜面に位置している。

鉱脈は明治26年（1893）に鳥谷部弥平治により発見され、昭和6年（1931）から昭和46年（1971）まで採掘が行われた。約78年の歴史を持つ鉱山である。鉱山操業全期間の産出量は金が約10.5トン、銀が約165トン、銅が約7700トンである。

最盛期の昭和15～17年頃は従業員数2500人で、家族は星置川、滝ノ沢川に沿って建てられた社宅に、人口約8000人が住んでいたと云われている。

戦時中の乱掘、地表陥没災害、金山整備令等の変換などの経緯もあったが、戦後も細々と操業していた。しかし、鉱量枯渇のため昭和46年9月閉山せざるを得なくなった。

閉山後は、坑内水の中和処理等鉱害、危害防止等の業務を行っている。

２．手稲鉱山の現況

現在は、坑内水の中和処理が主な業務であるが、1日当たり1200～1300 m³（年間約43万m³）坑内に溜まる水の処理である。特に雪解け時（4月中旬から5月中旬にかけて）は多く、1分に平均2～3 m³と普段の3倍ぐらいの水が溜まる。施設は最大5 m³／分の処理ができるように設計されている。

平成20年には滝ノ沢に移ったが、その前は星置の金山川（現在の稲穂川）に放流していた。中和処理というのは、坑内水に含まれる金属成分（カドミウム、鉛、砒素、亜鉛、鉄、マンガンなど）を消石灰を使って中和するものであり、年間200トンの消石灰が使われる。これは永久に行わなければならない処理である。

昭和61年12月28日には大災害があった。上の坑道から流れ込んだ水が一番下の坑道に溜まり、また、それに雪解け水、台風の大雨による水が加わり、夜の8時から翌日の12時までの間で、10万m³の水が溢れ出た。その水は、高速道路から国道5号線、新川をとおり石狩川に流れた。

そのようなことがないようにと、施設の老朽化もあり、また星置地区の住宅も増えたことから、現在の滝ノ沢の地に、平成18年更新工事を着手し、平成20年11月に現在の施設が完成した。

斜坑は、垂直距離68m、水平距離740mで、車で下りてメンテナンス作業ができるようになっている。ちなみに、昔の坑道の総延長距離は65kmである。

地上管理は、常駐3人の職員が担当しているが、緊急時には15～20分で作業員が集合して対処できるような体制になっている。

当社は、操業していないため収益をあげてはいない。したがって、運営資金は35%のマテリアルからの出資と65%の補助金で賄われる。補助金の分担割合は国が4分の3、北海道が4分の1である。かかる経費の内容は、水をきれいにするためにかかる材料費と職員3人の労務費である。

これは、北海道に下川、手稲、千歳の3鉱山にある。

（文責：小田真二）

次回の予定

次回（1月11日）は、一ノ宮博昭氏の研究発表「手稲史を彩る隠れた事象…」と、茂内義雄氏による「手稲史年表」の学習を予定しております。

会場は、視聴覚室です。